

プログラム評価の試行を受けた研究計画・評価分科会（第84回）で
いただいたご意見について（申し送り）

令和 5 年 2 月
研究計画・評価分科会事務局

第 1 1 期研究計画・評価分科会においては、令和 4 年 7 月 8 日の研究計画・評価分科会決定に基づき、令和 5 年 1 月 3 1 日に開催された同分科会においてあらかじめ定められたフォーマット等に基づき分野別委員会等からプログラムの進捗状況について報告を受けた。同日、同分科会において、今後のプログラム評価の進め方について御意見をいただいたところ以下にまとめた。

なお、以下の御意見については、分科会としてとしてまとめた意見ではなく、当日ご発言があったご意見について事務局において並列的にまとめたものである。

（プログラム評価の趣旨について）

- 複数の研究開発課題がある中で、それぞれの有機的な関連性を念頭に、「大」目標への貢献状況について俯瞰していくことが一番重要ではないか。その意味で、数値目標や数値指標のようなものだけを見ていくことの妥当性については疑問であり、例えば、現在のプロジェクトが次のプロジェクトにどのように繋がっていくのか、また、今動いている別なプロジェクトへの影響などが分かるような形にして、みていくことがあるべき姿ではないか。
- プログラム全体のアウトカム指標、概要に書かれたような趣旨から考えると、当該分野の研究開発基盤や環境の整備状況、当該分野の我が国の研究開発力と他国の比較、高度な研究機器の開発状況など、個別の研究開発課題というより、概要に書かれているような、分野についての状況がどうなっているかということが分かるような指標というのが立てられればしかるべきだが、実際は非常に難しいと思う。
- プログラム評価の評価票を埋めていく作業を行っていく中で、日本における当該分野の状況として最終的にどういう形になれば望ましく、研究課題群は構成として十分よいのか、という議論が、このプログラム評価という作業をする中で議論として展開されていけばとても良いと思う。今後は、各分野の中での建設的な議論を誘導していくような形に、変えていければよいのではないか。
- 数値目標は数字が先行し、例えば、論文生産を増やすことの必要性などに注意が行きがち。数値目標がある中で、きらりと光る良い仕事などのピックアップの難しさを感じた。
- プログラム評価のフォーマットの中に、プログラムの実施状況を踏まえた進捗状況のコメントを書けるような欄があったが、委員会の中は、そこまでの議論をする時間がなかった。今回は試行ということなので、次回からこの指標値の変化、あるいは進捗状況も踏まえて、委員会として、大変ではあるが、

プログラムの現状、今後の方向性、社会への影響のような、俯瞰的な意見を書くほうがよいかもしれない。

- 指標について、アウトプット指標とアウトカム指標の両方があるが、文科省の事業は通常5年で更新もしくは次のプロジェクトに移ることが多い。事業に切れ目があると、指標の継続性が途切れたり、空欄ができ、急に数字が出てきたりすることになる可能性がある。補助的な指標を加えることもできると思うが、テクニカルな面で問題点もある気がする。
- 統一フォーマットでデータ整理でき、情報が集まってきたことは今期大きく進歩したところ。各委員会で、分野について、この資料を使って、全体を俯瞰した議論がこの資料でできるのかどうかというのが、一つ課題としてあるのではないか。
- 委員会毎に議論をした上で、本分科会で議論をしていくなど、2段階の議論が要るのではないか。今日は資料のディテールをかなり急いで御紹介いただいたが、計評分科会では、この資料を基にどのような議論が分野別委員会でなされて、どのような状況だという説明をして、みんなで状況を俯瞰的に見ていくというようなやり方もあるのかとお聞きした。
- 内容の改善というものはあるかもしれないが、今回の情報をどううまく使って、分野での議論やさらには文科省全体のプログラムの議論というのができていけばいいのではないか。そういった観点で、今回の試行も踏まえて来期につないでいっていただければありがたい。

(プログラムの粒度について)

- プログラムの粒度や考え方が委員会毎で異なっているように見えており、もう少し統一した方がよいのではないかと感じる。

(プログラム評価の利害関係者について)

- プログラム評価が、いわゆる評価が主体ではなく、全体的に俯瞰して確認するということが主であるというのであれば、個々の研究開発課題の利害関係者は排除する必要はないのではないか。